

# 連合艦隊西進す3

スエズの彼方

横山信義

*Nobuyoshi Yokoyama*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

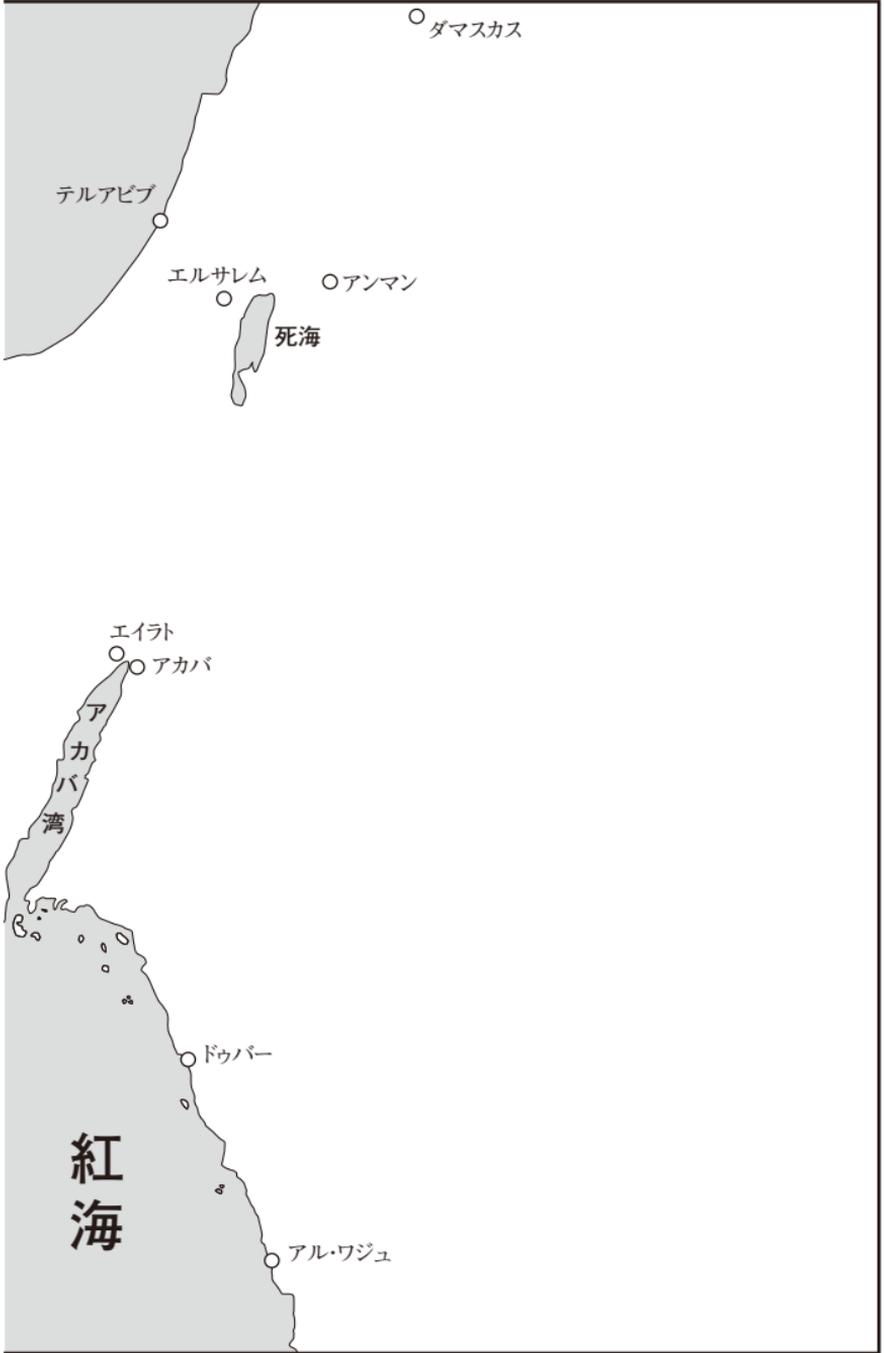
### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之  
地 図 ・ 図 版 安達裕章  
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	エジプト進攻	9
第二章	合衆国の思惑	47
第三章	運河の攻防	63
第四章	ポルトサイド沖海戦	103
第五章	「長門」 <sup>ながと</sup> 「陸奥」 <sup>むつ</sup> 咆哮	149
第六章	地中海への道	207



# スエズ周辺図

地中海







# 連合艦隊西進す 3

スエズの彼方



第一章 エジプト進攻

## 1

「世界有数の大河と聞いていたが、意外にたいしたことないな」

航空母艦「大龍」の艦上戦闘機隊第二小隊長を務める桑原寿中尉は、地上の光景を見て、そんな感想を抱いた。

薄茶色に染まった砂漠の中に、緑の帯のようなものが横たわり、その中央に青い流れが見える。

名高いナイル川と、その流域にある農地だ。

川幅自体は、それほど大きくない。

千葉県の市川で生まれ育った桑原には、江戸川や荒川の方が、よほど大きな川に感じられる。

ナイル川を大河たらしめているのは、川幅ではなく長さだ。

アフリカ大陸中央のビクトリア湖に端を発し、エジプトの北岸から地中海に注ぐまでに、緯度にして

三〇度以上を横切るのだ。

零戦のcockピットから見えるのは、ナイルのごく一部でしかないが、日本で生まれ育った身には、大陸を流れる大河の全貌は実感できなかった。

北上するにつれ、河畔に建造物が増える。

古代から連綿と受け継がれて来た遺跡もあるが、近代的なビルも多い。

エジプトの首都カイロだ。

その南東に、桑原らが目指す攻撃目標——エジプトにおける枢軸軍最大の航空基地がある。

「右前方、敵機！」

無線電話機のレシーバーに、「大龍」艦戦隊長板谷茂少佐の声が響いた。

機動部隊の艦上機には、米国から導入された無線電話機が装備されている。機体同士の通信を、声でやり取りできるようになったのだ。

情報の伝達速度も、正確さも、信号灯や手信号とは比較にならない。

桑原は、右前方を見た。

銀色に光るものが多数、攻撃隊の行く手を塞ふさごうとしてゐる。

反射光は非常に強い。よく研とぎ上げられた刃やいばを思わせる輝きらきだ。攻撃隊、特に艦上爆撃機の搭乗員にとつては、凶刃きようじんのきらめきに等しいであろう。

(数はほぼ互角か)

桑原は敵機の数を見積みもり、そのように推察した。敵機は二〇機前後の梯団ていだんが四隊。ざつと八〇機だ。

一方、日本軍——第三艦隊の空母から出撃した第一次攻撃隊は、零戦七二機、九九艦爆一四四機。

戦闘機の数では敵が僅わずかに多いが、ほぼ互角に戦える。

艦爆を守りながら戦わねばならない分、敵よりも不利な立場だだが——。

「神龍」の艦戦隊が、真まつ先に動いた。

全機が一斉に落下式増槽ぞうそうを投下し、エンジン・スロットルを開いて突撃に移った。

「大龍」隊が続き、第一航空戦隊の「翔鶴」「瑞鶴」、

第二航空戦隊の「蒼龍」「飛龍」、第五航空戦隊の「隼鷹」「飛鷹」から出撃した艦戦隊も、敵機に機首を向けている。

「逸はつっているな、『神龍』隊は」

第二小隊の二機を誘導しつづ、桑原は眩つぶいた。

「神龍」は、元米空母「サラトガ」だ。元「レキシントン」の「大龍」と共に、第四航空戦隊を編成するが、昨年一〇月のジブチ攻略作戦には訓練未了のために参加できなかつた。

「神龍」の乗組員も、艦上機隊の搭乗員も、そのことを悔くしがっており、「次こそは」と戦意を昂たかぶらせていたのだ。

前方では、空中戦が始まっている。

鼻先はなさきが獐犬じやうけんのように尖とがつた敵戦闘機——ドイツ空軍のメツサーシュミットBf109が、有利な高度から逆落さかおとしに突つ込み、機首に発射炎ひらめを閃かせ。細く鋭い二条の火箭かせんが、零戦の真上から降り注

ぐ。

「神龍」隊の零戦は、機体を右、あるいは左に大きく倒し、急角度の水平旋回をかける。

メッサーシュミットの射弾に貫かれる機体はない。全機が得意の小回り転回で、敵弾をかわしている。

一連射を浴びせたメッサーシュミットは、速度を緩めることなく、下方へと離脱する。

ジブチでも見せた、急降下による一撃離脱だ。命中の有無にはこだわらない。一連射を放った後は、即座に離脱し、零戦に銃撃の機会を与えない。

「神龍」隊も深追いしない。離脱した敵機には目もくれず、新たな敵機に立ち向かう。

右に、左に急旋回を繰り返し、敵の射弾に空を切りせる。

好機を捉えて機首の七・七ミリ機銃、両翼の二〇ミリ機銃を発射し、敵機に一撃を見舞う。

七・七ミリ弾を受けた機体は、火を噴くことなく離脱することが多いが、二〇ミリ弾はメッサーシュ

ミットの主翼を叩き折り、胴体の外板を引き裂く。

「大龍」隊にも、敵機が向かって来た。

板谷少佐の第一小隊が左に、桑原の第二小隊、末次京一郎飛行兵曹長の第三小隊は右に、それぞれ急旋回をかける。

突っ込んで来たメッサーシュミットに、道を空けたかのようだ。

「左旋回！」

桑原は、無線電話機のマイクに怒鳴り込むようにして、二番機の前沢稔一等飛行兵曹、三番機の吉永浩一郎三等飛行兵曹に指示を送った。

同時に、操縦桿を右から左に傾けた。

右に急旋回していた零戦が、今度は左に大きく傾き、急旋回の態勢に入る。

メッサーシュミットが二機、第二小隊に機首を向けた。獲物を狙う狼のような勢いで、桑原機に突っ込んで来た。

敵一番機がプロペラ・スピナーに発射炎を閃かせ

る。ほとんど同時に桑原も、発射把柄はへいを握っている。一番機の機首からほとばしった火箭と、零戦の両翼から噴き延びた二条の火箭が交錯こうさくするが、どちらも大気を貫くだけだ。

敵一番機と桑原機が猛速ですれ違った直後、敵二番機が射弾を放つて来る。

桑原は、発砲の時機ときを掴つかめなかつたが、敵弾も桑原機を捉えることはない。

正面からの撃ち合いでは、相対速度は時速二〇〇〇キロを超える。射撃の機会は一瞬しかなく、命中確率は極めて小さい。

二番機とすれ違った直後、風防ガラスが炎の色を反射して赤く染まった。

「敵二番機撃墜！」

吉永の弾はずんだ声がレシーバーに伝わる。

第二小隊の中で一番若い搭乗員が、初戦果を上げたのだ。

「隊長、左後方！」

部下の戦果を喜ぶ間もなく、前沢の声がレシーバーに飛び込む。

桑原は即座に「左旋回！」を下令かし、操縦桿を左に大きく倒す。

零戦が大きく左に傾斜し、急角度の旋回に入る。

機体が後方を向くと同時に、複数の方向から同時に放たれた火箭が、吉永機を貫く様が目に入った。

桑原が大きく両目を見開いたとき、吉永機の右主翼から火焰かえんが躍おどり、機体が一瞬で碎け散つた。

二〇ミリの弾倉の誘爆だ。吉永の初戦果は、同時に最後の戦果となつたのだ。

吉永機を墜おとした敵機が、前沢機、桑原機に向かって来る。

「垂直降下！」

桑原は、咄嗟とつさに前沢に指示を送つた。

同時に操縦桿を右に倒し、機体を横転させた。

「大龍」艦戦隊の現在の装備機は、零戦三二型。エンジンなかしまを中島「栄」一二型から、出力を向上させた

「栄」二一型に換装し、主翼の端を切り詰めた型だ。旋回性能、航続性能が若干低下したが、最高速度や上昇性能、ロール率は向上している。

視界の中で敵機が回転し、左方へと吹っ飛ぶ。

「上昇反転！」

機首を引き起こしながら、桑原は指示を送った。

「栄」二一型が力強く咆哮し、零戦の機体を引っ張り上げる。

宙返りの頂点に達したところで、機体が回転し、メッサーシュミット二機の後ろ上方に占位している。

敵機は、右の水平旋回をかけた。

その先に、第二小隊とは別の零戦がある。乱戦の中、味方機とはぐれたのかもしれない。

「前沢、続け！」

桑原は命じると同時に、エンジン・スロットルをフルに開いた。

零戦が加速され、メッサーシュミットの後ろ上方から距離を詰めた。

メッサーシュミット二機に、回避の動きは見えない。零戦を追うのに気を取られ、背後の敵に気づいていないのかもしれない。

メッサーシュミット二番機が、たぐり寄せるようにならびて来る。照準器の白い環の中で、敵機の機影が膨れ上がる。

背後の敵機に気づいたのか、敵二機がほぼ同時に右旋回をかけた。

桑原も操縦桿を右に倒し、敵二番機の内側へと食いつかる。

二一型に比べ、旋回性能は若干落ちたものの、他国の戦闘機より優秀だ。先行するメッサーシュミットよりも小さな旋回半径を描き、内側へと食い下がる。

頃合いよしと見て、桑原は発射把柄を握った。

両翼から太い火箭が噴き延び、狙い過たずメッサーシュミットのエンジン・カウリングから右主翼の付け根付近に突き刺さった。

火花と共に破片が飛び散り、メッサーシユミットの機首から黒煙が噴き出す。うなだれたように機首を下げ、眼下の砂漠へと墜落する。

メッサーシユミットの一番機は、姿がない。二番機が墜とされている間に、離脱したのかもしれない。

「後方、敵二機！」

「次から次へと！」

前沢の叫び声を聞き、桑原は操縦桿を左に倒した。空中戦は、彼我の機体が混濁する乱戦状態だ。とにかく、手近な敵機と戦うだけだ。

零戦が左に旋回するや、左後方から火箭が飛び、翼端付近に命中して火花を散らした。桑原は罵声を漏らしながらも、右旋回に切り替えた。

今度は右後方から射弾が放たれ、敵弾がコクピットの右脇を通過した。

(いかん、挟まれた！)

桑原は、敵の罠に落ちたことを悟った。

メッサーシユミットは二機が一組となり、桑原機

の後方に付けたのだ。桑原機が左右どちらに旋回しても、逃がさない態勢だ。

桑原は歯噛みしながら、左に、右にと、不規則に操縦桿を倒し、旋回を繰り返した。

後方から噴き延びる七・九ミリ弾が胴体や主翼をかすめ、不気味な打撃音を立てる。

一度ならず、コクピット付近に命中弾があり、機体が衝撃に震える。

ちらと後方を振り返ると、メッサーシユミットが間近に見える。

もう距離はほとんどない。プロペラ・スピナーの二〇ミリ機銃は、今にも火を噴きそうだ。

(やられる！)

そう直感したとき、右後方の敵機が火を噴いた。機首から黒煙が噴出し、プロペラが停止した。機

体を右に大きく傾け、桑原の視界から姿を消した。

左後方の敵機は、機体を左に横転させ、垂直降下で離脱する。

「小隊長、御無事ですか?!」

「助かった。感謝する!」

レシーバーに響いた前沢の声に、桑原は礼を返した。

二番機の役割は、一番機の援護だ。際どいところではあったが、前沢はその役割を果たしたのだ。

「艦爆隊の援護に向かう。続け!」

桑原は前沢に命じた。

メッサーシュミットとの戦闘では深追いを避けるつもりだったが、乱戦に巻き込まれ、予想以上に手間取った。

できる限り早く、本来の任務に戻らねばならない。

操縦桿を手前に引き、機首を上向ける。エンジン・スロットルを開き、上昇を開始する。

零戦とメッサーシュミットが入り乱れての空中戦は、なおも続いている。

零戦は旋回性能を最大限に活かして、上下に、左右に飛び回り、メッサーシュミットの突っ込みをか

わしているが、全機が敵弾をかわし切れるわけではない。

水平旋回によって後方の敵機をかわした零戦が、別の敵機に横合いからの一連射を撃ち込まれる。

緩横転によって敵機をやり過ぎた零戦は、背面になったところで敵弾を受け、ジュラルミンの破片を撒き散らしながら落ちてゆく。

零戦を墜としたメッサーシュミットが、急降下によって離脱したところに、低高度にいた零戦が一連射を浴びせる。

二〇ミリ弾を浴びたメッサーシュミットは、ひとたまりもなく打ち砕かれ、ばらばらになって砂漠に落下する。

どちらが優勢なのかは、判別できない。

はつきりしているのは、日独どちらの戦闘機乗りも、一步も退くつもりはないということだ。

上昇する桑原機、前沢機にも、二機のメッサーシュミットが、前上方から突っ込んで来た。

敵機の機首に発射炎が閃く寸前、桑原機は左に、

前沢機は右に、それぞれ機体を倒した。

横倒しになった零戦の下腹をかすめるようにして、

メツサーシユミットの射弾が通過する。

桑原機、前沢機は、メツサーシユミットの後方に抜ける。

敵機とやり合うつもりはない。当面は、艦爆隊の援護が優先だ。

艦爆隊は所属する母艦毎ごとに分かれ、緊密きんみつな編隊形を組んでいる。

「大龍」隊と「神龍」隊の後ろ上方に、複数の敵機が見える。

機体を左右に振って旋回機銃の火箭をかわし、隙すきを見ては突進して、機首から二条の火箭を放っている。

「大龍」隊の後方に位置する機体が二機、続けざまに火を噴いて高度を落とすし、「神龍」隊の所属機も一機が墜とされる。

「今、行くぞ！」

一声叫び、桑原は艦爆隊の後方に位置する敵機に突進した。

艦爆隊の後方で、左右に旋回を繰り返しているためだろう、敵機の速力はさほど大きくない。零戦との距離が、みるみる縮まる。

桑原は、敵一機の後ろから食らいついた。

「くたばれ！」

の叫び声と共に、発射把柄を握った。

二〇ミリ弾の太い火箭が、敵機の両翼に突き刺さる。

補助翼がちぎれて吹っ飛び、次いで左右の主翼が中央付近から分断される。

一瞬で揚力ようりょくを失った敵機は、機首を大きく下げ、真つ逆さまに墜落する。

僚機りょうきの墜落を悟った敵機が機体を翻すが、反転ひるがえを終えるより早く、前沢機が射弾を叩き込む。

二〇ミリ弾の太い火箭が、エンジン・カウリング

からコクピットにかけて突き刺さり、敵機は黒煙に包まれながら落ちてゆく。

「メッサーシュミットじゃないな」

桑原は、直感的に敵の機種を見抜いた。

メッサーシュミットと同様の液冷エンジン機だが、全体の印象は微妙に異なる。

何よりも、胴体に描かれたマークが鉄十字ではない。英軍機のラウンデル・マークに似ているが、色は赤、白、緑だ。

イタリアの戦闘機だった。

(本来の役割通りか)

桑原は、敵の事情を推察した。

戦場が欧州から北アフリカに拡大したのは、イタリアの動きが原因だと聞いている。

リビア、チュニジアを支配下に収めていたイタリアが、エジプトを版図に加えようと動いたことから、北アフリカの砂漠や地中海は、熾烈な戦場になったのだ。

そのエジプトに連合軍が進攻して来たため、イタリア軍も同地を守ろうとしているのだろう。

「エジプトの防衛は、我々の任務だ。ドイツばかりに任せておけぬ」

そんな心の声が聞こえるような気がした。

イタリア機のうち、二機が九九艦爆への攻撃を中断し、反転する。

桑原は加速し、イタリア機との距離を詰めた。

敵機の発砲が僅かに早い。

メッサーシュミットと同じく、エンジン・カウリングの上に発射炎が閃き、二条の火箭が噴き延びる。一瞬遅れて、桑原も発射把柄を握る。

二〇ミリ銃の太い火箭と、イタリア機が放つたやや細い火箭が交差し、各々の目標に殺到する。

双方共に、被弾はない。

イタリア機の射弾は桑原機の右翼端をかすめたが、桑原が発射した二〇ミリ弾も、目標を捉えることなく終わる。

敵二番機との射撃戦も、結果は同じだ。射弾は空を切り、桑原の二〇ミリ弾は無駄弾に終わる。

二番機とすれ違った直後、桑原機の後方で爆発が起きた。

小隊長機の後方に付けていた前沢機が、敵二番機を墜としたのだ。

九九艦爆への攻撃を続けていたイタリア機が、避退に移った。

次々と機体を横転させ、急降下によって離脱する。乱戦の場から脱した零戦が、艦爆隊の援護に駆けつけたのだ。

イタリア軍の搭乗員は零戦の数を見て、不利を悟ったのだろう。

桑原は前沢を従え、艦爆隊の後ろ上方に占位した。(これ以上は、一機も墜とさせぬ)

自身にそう言い聞かせつつ、周囲の空を見渡した。メッサーシュミットも、イタリア軍の戦闘機も、

艦爆隊に仕掛けて来る様子はない。

艦爆隊は被撃墜機を出しながらも、カイロ近郊の敵飛行場を目指して進撃を続けている。

ほどなく前方に湧き出した黒い爆煙が、攻撃隊の行く手を遮った。

総指揮官機から命令が飛んだのだろう、九九艦爆が次々と機体を翻し、急降下を開始した。

## 2

「我、『カイロ』飛行場ヲ攻撃ス。滑走路、付帯設備ヘノ命中弾多数。効果大ナレド敵戦闘機ノ迎撃熾烈ナリ。今ヨリ帰投ス。一七〇〇(日本時間。現地時間一〇時)」

通信参謀中島親孝少佐の報告が、第三艦隊旗艦「翔鶴」の艦橋に上げられた。

「効果大」とは曖昧な報告だな。敵飛行場は使用不能に追い込んだのか、まだ使用可能なのか」

参謀長山田定義少将は、首席参謀高田利種大佐、

航空甲参謀内藤雄中佐らの幕僚を見やつて疑問を提起した。

「大打撃を与えたものの、滑走路や付帯設備の一部に使用可能なものが残っている、といったところでしよう。第二次攻撃で、完全に使用不能に追い込めると考えます」

内藤航空甲参謀が、山田に答えた。

第三艦隊は現在、紅海の北部に展開している。

エジプトの東岸とシナイ半島に挟まれた、スエズ湾の湾口付近だ。

攻撃目標であるカイロ近郊の敵飛行場は、第三艦隊の北西、約二〇〇哩の地点にある。

エジプトに設けられている枢軸軍の航空基地の中では、最大の規模を持つ。

スエズ湾の制空権を確保するには、是が非でも叩かねばならない場所だ。

攻撃の手順は、昨年一〇月のジブチ攻撃を踏襲している。

第一次攻撃隊を艦戦、艦爆で編成して敵飛行場に第一撃を加え、艦戦、艦攻で編成した第二次攻撃隊で止めを刺すのだ。

ジブチ攻撃では、最初の一撃で敵飛行場を壊滅に追い込んだが、カイロの敵飛行場は、ジブチのそれよりも遥かに規模が大きい。

第一次攻撃のみで機能を完全に停止させるのは、流石に難しかったようだ。

幸い、第二次攻撃隊は第一次攻撃隊の一時間後に出撃している。

編成は零戦七二機、九七艦攻一三八機だ。

第二次攻撃隊が敵飛行場を使用不能に追い込むのは確実です——と、内藤は言った。

『敵戦闘機ノ迎撃熾烈ナリ』の報告が気になるどころだな。第一次攻撃隊に、どの程度の損害が生じたか

「昨年一〇月のジブチ攻撃では、零戦がメッサシーユミットと互角以上に戦えることが証明されています

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。